

# ジョイスから女たちへ愛をこめて

## 『ユリシーズ』におけるパロディによる革命と女性讃歌

新名 桂子

### 序

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) の出版は衝撃であった。これは、「意識の流れ」の技法が使われているからとか、猥褻で過激なタブー語が使われているからというだけの理由ではない。そもそも『ユリシーズ』は一般的な意味で読み通すことすらできないほどの難物であり、従来の傑作とされる文学の条件にことごとく抵触するもので、文学や読書の概念を根底から変えてしまうほどのものだったのだ。この難解さゆえ、『ユリシーズ』のすごさと魅力を分かりやすく説明するのはたやすいことではない。本発表では、出版 100 周年を記念して、改めて『ユリシーズ』の何がすごいのかについて革命性とヒューマニズムの観点から考える。

その際、二つの問いを立てる。一つは、ジョイスは『ユリシーズ』で何をしたのかというものである。『オデュッセイア』のパロディを「意識の流れ」の手法で書いたという模範解答をヴァージョンアップして、『ユリシーズ』を『オデュッセイア』のみならず 19 世紀文学のパロディでもあるという視点から読む時、本書がどのような革命性を持つかを明らかにする。もう一つは、ジョイスはなぜ『ユリシーズ』を書いたのかというものである。このことを、第一の問いの答えを踏まえつつ、多くの苦労と多産の末、44 歳で亡くなった母親メアリー・ジェーン (「メイ」)・ジョイス (Mary Jane 'May' Joyce) との関係、および、生涯の伴侶ノラ (Nora Barnacle) との関係において説明し、本書がいかにヒューマニズムに基づく作品であることを示す。

### 1. ジョイスは『ユリシーズ』で何をしたのか

#### (1) ジョイスはパロディで勝負した——『ユリシーズ』の難解さの秘密

『ユリシーズ』は非常に読みにくい小説である。その難解さの原因の一つは、ジョイスが『ユリシーズ』で、物語ではなく、パロディで勝負しているということである。しかも、『ユリシーズ』の原テキストは、よく言われているように『オデュッセイア』だけ、というわけではなく、その他にも重要な原テキストがあると考えられる。パロディ文学においては、読者に原テキスト情報が正しく認識されなければ、パロディの効果がないばかりか、読むことそのものが著しく困難となるため、『ユリシーズ』が難解なのは当然である。

#### (2) 『ユリシーズ』の原テキストは何か

『ユリシーズ』の、『オデュッセイア』以外の見逃されてきた原テキストは何か。重要な原テキストとして、フローベールの『ボヴァリー夫人』 (*Madame Bovary*, 1857)、トルストイの『アンナ・カレーニナ』 (*Anna Karenina*, 1877)、同じく『クロイツェル・ソナタ』 (*The Kreutzer Sonata*, 1889) がある。これらの作品はいずれも人妻の姦通を扱っており——ただし、『クロイツェル・ソナタ』のみは、妻が姦通の事実を認めていないが——姦通を犯した妻、あるいは姦通を犯したと疑われた妻は、絶望して自殺したり、夫によって殺されたりという悲惨な死を迎える。これら三作品が『ユリシーズ』の原テキストになっていることは、登場人物の精巧な対応や場面や言葉の共鳴関係から明らかである。

#### (3) パロディによる物語 (19 世紀時代精神) の破壊

では、『ユリシーズ』の深層に原テキストとしてこれらの 19 世紀文学があるとすれば、『ユリシーズ』をどのように読むことができるだろうか。『ユリシーズ』の主要な出来事は、オフステージで起こるブルームの妻モリーと、彼女のコンサートツアーの興行師ボイランとの情事だが、モリーが絶望のあまり死ぬとか、夫から殺されることがないばかりか、罪の意識さえ持つことなく、陽気で幸せに人生は続くという結末になっている。この結末で一体何が起きているのだろうか。19 世紀西洋の結婚観からすれば、妻の姦通は社会的に許容されない重大な罪であった。上記三作品は、19 世紀の時代精神——不定の妻は罰を受けて悲劇的な最期を遂げる——を体現した物語である。この点を踏まえて、『ユリシーズ』を 19 世紀文学との関連で読むなら、本書はこれら三作品のパロディになっていると考えられる。ジョイスは、『ユリシーズ』において 19 世紀文学の悲惨な結末の悲劇を、パロディという手法を使って不貞の妻が死ぬどころか陽気で幸せに生き延びる喜劇に書き換

えた。『ユリシーズ』は、19世紀の西洋世界の常識を、パロディの笑いの力によって木っ端みじんに粉砕するという大革命を起こしているのである。

## 2. ジョイスはなぜ『ユリシーズ』を書いたのか——『ユリシーズ』における女性讃歌

### (1) 母親への鎮魂歌としての『ユリシーズ』

では、ジョイスはなぜこのような物語——不貞の妻が罰を受けず、幸せに生き延びる物語——を書いたのだろうか。この点について、彼の母親に対する強い想いを無視することはできない。ノラに出逢って二か月半ほどたった頃、彼女に宛てて書いた手紙（1904年8月29日付）には、前年の母親の死の有様とともに母親を犠牲者にした社会への強い憤りが表現されている。“My mother was slowly killed, I think, by my father’s ill-treatment, by years of trouble, and by my cynical frankness of conduct. When I looked on her face as she lay in her coffin—a face grey and wasted with cancer—I understood that I was looking on the face of a victim and I cursed the system which had made her a victim” (Ellmann, editor. 48). この言葉を心に持って『ユリシーズ』を読むならば、本書が、貧困と苦しみの果てに亡くなった母親への深い想いが通奏低音のように響き渡る母親への鎮魂歌であることが理解できるだろう。そして、みじめに亡くなった可哀そうな母親の姿が描かれながらも、そればかりではなく、より自由で幸せな妻モリーが描かれており、ジョイスなりの理想的な「新しい妻」が創造されているのである。

### (2) ノラへのラヴレターとしての『ユリシーズ』

ところで、『ユリシーズ』が誰のために書かれたかという点、ジョイスの最愛のノラのためである。本書は、ジョイスが彼女と初めてデートした1904年6月16日を記念して書かれた本であり、彼が最も読んで欲しかったのも彼女だった。『ユリシーズ』はノラへのラヴレターなのだ (Birmingham 142-3)。

では、ジョイスはなぜ、最愛のノラへの心をこめたラヴレターであるはずの本書において、ヒロインのモリーを不貞の妻にしたのだろうか。彼がモリーを不貞の妻にしたのは、決してただの悪ふざけなどではなく、当時の結婚をめぐる問題に彼がこの上なく真剣に取り組んだ結果である。Janine Utellによれば、ジョイスにとって結婚と姦通は、他者に係り合い、他者と向かい合い、他者を認識するための場であった(2)。結婚において、人は他者と一体になると言われるが、実際にはその様なことは不可能であり、その不可能性を認識して相手の自由と自律性（性的自由も含めた自由と自律性）を尊重することこそが愛の倫理である。ジョイスは、モリーに不貞を働かせるばかりではなく、ブルームに妻の不貞に寛容な態度をとらせているが、このことは、ユーテルの考えを援用するなら、当時の結婚の由々しき問題——妻が夫の所有物として扱われている問題——への彼なりの真摯な答えであったと考えられる。つまり、モリーが不貞の妻であることはジョイスにとって必然のことだった。当時の問題ある結婚をよりよい結婚へとヴァージョンアップするためのある種の仕掛けとして、夫婦関係にはぜひとも姦通の要素が必要だったのである。

## 結

ジョイスが『ユリシーズ』で何をしたかという点、不貞の妻が悲惨な死を遂げる筋立ての19世紀文学をパロディにして不貞の妻が陽気に生き延びる話に書き換え、笑いの力で19世紀西洋の抑圧的な時代精神を破壊するという大胆かつパワフルな革命を起こしているのだ。つまり、パロディの笑いによって世界を変えたのである。

また、彼がなぜ『ユリシーズ』を書いたのかについては、一つには、当時の厳しい社会規範の中で苦しい人生を送り、若くしてみじめに死んでいった母親への深い愛が原動力となっているのだが、もう一つには、ノラに母親と同じようなつらい思いをさせないために、女たちが自由で幸せに生きられる世界への変革を促すためでもある。母親への鎮魂歌であり、ノラへのラヴレターである本書は、女たちの苦しい人生をより自由で幸せな人生へと書き換えているのである。

このように、『ユリシーズ』は、ジョイスから女たちへの愛とヒューマニズムに基づいた革命の書であり、その魅力とすごさはこの点からも明らかである。

## 引用・参考文献

Birmingham, Kevin. *The Most Dangerous Book: The Battle for James Joyce's Ulysses*. The Penguin P, 2014.

Ellmann, Richard, editor. *Letters of James Joyce*, vol. II, 1966.

Utell, Janine. *James Joyce and the Revolt of Love: Marriage, Adultery, Desire*. Palgrave Macmillan, 2010.